

惨げんの態たいである。妻子さいしは病院びやういんへ、自分じぶんは極度きょくどの神經衰弱しんけいすわく。生きる希望きぼうを失うしなつて、ある夜よ、品川しながはの海岸かいがんを歩あるいてゐた。黒い海くろいうみに魅みせられて、一歩いっぽ々々死しに近づちかづいてゐた。その時ときふと、私わたしのことを思おもひ出した。

夜よるおそく、亡靈ほうれいのやうに、私わたしの布教所ふけうじよへ來きた。布教所ふけうじよとは云いへ、例れいの貧民窟ひんみんくつの二階にかいである。六疊むつとひ一ト間まである。

『丸山君、參まゐつた』

と云いつて、ガツクリ首うな垂たれた。

『どうかね、少しは榮養えいようが利きいたかね』

『それどころぢやないんだ。全まったくお話はなしにならないんだ。……これでも救きうはれる道みちがあるだらうか』

『あるよ。大おほいにあるよ』

『どこにあるんだ。頼たのむ、どうか宜敷よろしく導みちびいてくれ給たまへ』

『どんなことでも、絶對ぜつたいに俺おれの云いふことを聞きくといふ決心けつしんをし給たまへ』

『うむ』

『決心けつしん出來できたかね。——僕ぼくは明日本部めいじっぽへ參拜さんはいに行くのだ。君きみも一緒いっしょに行いかう』

返事へんじがなかつた。妙うな顔かほをした。

『何なんだ、絶對ぜつたい聞きくのぢやないのか。それぢや僕ぼくはもう知らない』

『いや行くよ、行くよ』

『どうせ君、死ぬ氣なんだらう。魚の餌になつて死ぬ身が、友
の腕に抱かれて死んだ方が意義あるぢやないか』

『行けば三日や四日かゝるんだらう。それでは役所の方が――』

『それぢやもうよいから、品川へ行き給へ』

とう／＼私は笑つてしまつた。彼も、沈痛な顔に微笑をもら
した。そして、参拜する決心をした。

『ところが君、明日は君以外に重病人が三人も居るんだ。子宮
癌と中氣と腸結核とだ。三人に比べると、君は問題にならない
のだから、餘りお世話できないかも知れないよ』

と、私は念を押しておいた。

翌日、約束の時間に、中氣も、子宮癌も、腸結核も東京驛に

集まつた。彼だけが來なかつた。やつぱり駄目か、と思ふてゐ
ると、時間ぎり／＼に、旅装もせず、ステッキ一本ついてやつ
て來た。その後には、入院してゐる筈の細君がやつて來た。

『丸山君、妻の奴に反對されて、ホト／＼参つた。僕は堅い約
束してあるのだから斷れない。お前が行つて斷つてくれと頼ん
で連れて來た』

と、彼は細君を私に引き合せた。

『奥さん、幸福になりたいと思ひますか』

時間がないので、迂遠なことを云つてをられない。

『はい――』

『御主人は随分高慢ちきで、我儘ですな。奥様は随分お困りで

せう。私がひき受けて、御主人の心を治してみせませう。その
間、四五日御主人を貸して下さい』

細君は、ニツコリした。

『ぢや、あなた行つて下さる』

と云つた。

『だつて俺は、金を持つて來なかつた』

細君は、いそ／＼して帶の間から墓口を出して、そのまま彼
に手渡した。

時間が迫つてゐるので、ホームへ急ぐのだが、私一人にとつ
ては餘りにも荷物が多すぎた。中氣は負はねばならん、腸結核
の手を曳いてやらねばならん、そして、トランクを携げねばな

らん。彼は見兼ねて、ひのきしんをしてくれた。私は、昨夜、
品川で死にかゝつてゐた男が今日は自分の病氣を忘れてトラン
クを持つてゆく姿を尊く眺めた。そして、大きな荷物を負ひ切
れないほど持つて眞剣にやつてをれば、小さい荷物は自ら片付
いてゆくものだと思つた。

車中での病の世話もなか／＼並大抵ではなかつた。腸結核を
幾度となく便所に連れてゆかねばならなかつたし、中氣は一々
おんぶして狭い通路を往來しなければならなかつた。

それでゐて病人達は皆元氣だ。友人はその姿、その心持を不
審に打ち眺めた。

『かうしてみると君、僕の病氣なんか問題にならないね、大し

たものだな』

と感心し、

『これが皆、なほるのだらうか』

と云つた。

『病氣のことは考へるな、病氣よりも先に、心をなほさねばいけないよ。病氣は、心がなほつてからでよい』

そのうちに彼は眠りだした。よく眠つた。名古屋近く來てるのに起きない。

『おい、もう來たよ』

『なに、もう來たか。僕は七時間以上も寝たんだね。實に不思議だ。神經衰弱で夜は殆ど安眠したことなんかなかつたんだ。』

それが君、この汽車の中で、よくこれだけ安らかに眠れたものだ。頭が、スーツとしたよ君、これが君の云ふ、神様つてもんかね』

と彼は嬉しさに云つた。

名古屋の乗替へも大變だつたが、彼は東京驛のひのきしんよりも、倍も三倍もの荷物を持つてくれた。そして、汽車に乗つてから、

『お腹が空いてきた』

と云ふた。

さうすると、腸結核も亦『先生、お腹が空いて來ました』と云ふ。

『重湯もなにもないよ。汽車辨當でいゝか。それから君——君もこゝでは榮養物がないけれども、汽車辨當でがまんするか』
彼は笑つて『俺がひのきしんしよう』と飛び出して、五本の辨當を買つて來た。

皆な、おいしい〜と云つて食べた。殊に腸結核は、昨日まで、おも湯しか通らなかつたのに、きれいに食べてしまつて、

『先生、こんなに食べて、わたしは恥しい』

と云ふのである。皆、笑つた。友人は、自分より重い病人が、目に見えて助かつてゆく姿に、たゞ感激した。

本部に着くと、四人の病人は四人とも益々元氣だつた。子宮癌が腸結核を抱いて三年ぶりの風呂に入れてやる。こん

なに氣分のいゝことはないと云つて喜んでゐる。その翌日は、皆なでお墓地に参拜したが、五丁の道を途中三回ほど休んだだけで歩きおほせた。連れてゐる私も、たまらない感激を覺える。それにもまして、四人の病人の歡喜は筆舌に絶してゐた。
恰も、本部境内の地上げで、土持ちひのきしんが行はれてゐた。腸結核は、遂に、これも出来るまでになつた。友人も加はつた。何萬といふ人々が右往左往してゐるのだ。その混雜はひと通りでない。少々、人によつかつて、しやうがないのだ。彼も亦、思はず、前に行く人に激しく衝き當つて、よろめいた。さうすると、向ふの人が『やあどうも、申譯ありません、どうもありませんでしたか』と、謝まつた。彼は呆然とした。

突き當つて、謝まられるといふ、こんな世界は知らなかつた。

(こゝは違つた世界だ)

と感謝した。

『丸山君、わかつたよ。有難う、何も彼もわつたよ。此處こそ人の世界だつたんだね。此處に比べると、僕の家庭は、まるで動物園だつた。はづかしくてお話にならない——』

かう云つて涙を流した。今や、彼には、見るもの、聞くもの、全てが感謝と感激の種ならざるはない。見違へるほど元氣になつて歸京した。

それから一週間ほどしてから彼の家を訪れた。日曜日で、親子三人が楽しさうに遊んでゐた。細君が出て来て、

『先生！』

と云つて頭を下げた。

『どうですか——』

『先生、本當に幸せにしていたゞきました。結婚生活五年、こんな楽しい日を初めて迎へました。主人の有難さが胸に迫つて感じられます』

と云つた。

親子三人が、初めてこの世に歡喜を見出した。理窟を云ふてゐる時には夢、思ひも描かなかつた世界が、思ひ切つて天意に添ふた生活をしてみて、この世の歡喜、これに過ぎるものはないといふ境地を知つたのである。

眞の喜びは、天の與へでなくてはならぬ。私は、その喜び、その楽しみだけを味ふ。それ以外の楽しみは、求めたつて、つまらない。

昨日と今日、まるきり變つてゆく人の姿。

そこに見出す神の姿。

私さへ、己を空しうして勤めきつてをれば病氣一つせずにくく／＼と伸び育つてゆく子供の姿。

これこそ、天の與へ給ふ楽しみだ。斷じてこれに勝る歡喜がこの世にあるとは思へない。

四

飲んだくれである。子供を四人抱へた家のことを考へもせず酒びたりの男である。卅三歳の若さで中氣になつて動けなくなつた。たうとう一家六人、方面委員の厄介になつた。

こゝへお助けに運んだ。

四疊一ト間に家族六人である。晝間から蚊が鳴いてゐる薄暗いところだ。何だか云ひやうのない、酸ツばい臭ひと溝の悪臭がたちこめてゐる、衛生もなにもあつたものでない。まさに人生のどん底である。かういふ様を見るにつけても、贅澤云ふては勿體ないと思つた。

私は、たゞこの人に徳を積む道を説いた。凡ゆる方面から眞劍に徳を積んで、一日も早く、人に心配をかけない、政府の御

世話にならぬ人間になれと云つた。

或る秋、東京に大水が出て、その貧民窟は水浸しになつた。この家の最大の被害は、その前日、買ったばかりの米を流してしまつたことであつた。

避難所に訪ねてゆくと、

『昨日米を買つて今日失ふたんです。御恩報じが出来てないからでせうね』

と云ふ。私は、怒鳴りつけた。

『馬鹿なことを云つちやいけない。私は、あなたから一合二合の米をお供へして貰ひたくて來てるのではないのだ。一日も早く政府のお世話になつてゐるところから放れてもらひたいの』

だ。三度の食事を二度に一度にしても、眞剣にその努力をしてもらひたいのだ。來年は二千六百年だ。その記念に、來年こそ公民権を持つた一人前の人間になつてくれ。――』

男は、ホロ／＼と涙をこぼした。

不思議に子供達は良く出來た。學校の成績も良い、親の定めた記念事業に手傳ひをして、朝も晩も、一生懸命にボタン付けの手内職をした。三番目の子が殊に成績が良かったので先生が訪ねて來て、高等科に入るようにと奨めた。

『二千六百年の玉串に、もうこれ以上、政府のお世話にならぬことにしてをります』

と云つて、先生を感動させた。

その男も、やがて、不自由な手を動かして内職を始めた。さうして、

『先生、これは私の儲けです。どうか、これを、私と同じやうな人達を救ふ道にお使ひ下さい』

と云ふて出してくれる。

その姿を見て、あゝ、彼も神の恵みに浴する日が来た。あゝ、彼は救はれたり、と叫ばずにはゐられない。そして、腹の底から湧き上つてくる喜びに酔ふのである。

私は、東京中の困つた人間——食ふにも食へん、醫者にもかかれん、さういふどん底の人間を集めて助けてやらうと、胸に描いてゐる。布教の第一歩から、谷底布教がその本願であつ

た。それが、八年にして、行く可き道がはつきり見えて来た。私の理想的教會は、小部屋の多いバラツクである。こゝで、方面委員の手餘りを集める。たゞし、入る時に、『僕と一緒に生活しよう。君達だけを飢ゑさすことはない。君達に飢ゑる時は僕も一緒に飢ゑる時だ。これだけ承知しておいてほしい』

と云ひ渡す。

それから、東京の近郊に農園を求めて、病ひの助かつた者をこゝへ送る。土に親しんで信仰を培ひ、信心の進んだ者から順次別科に送る。

これが私の理想教會である。

私は、谷底布教にさへげてこそ、大地を踏みしめて立つといふ宗教家らしい歩みが出来ると信じてゐる。

西吹かうが東吹かうがビクとも動かない生活と信念、それは自らが困苦と缺乏の中に投じて、さういふ人々と共に生きてこそ造られるものであると思ふのである。

今日一日

一

彼は紙屋の小僧である。主人の目があらうとなからうと、自分の仕事にたい忠實な彼であつた。一口に云へば、己の職務に全没我的であつた。

この店がある事情から致命的の打撃を受けた。店員達は、こんな店にをつても將來性がない。一日でも長くをればをるだけ

損になると、一人さり二人さりした。遂に残る者は彼一人となつた。店員が減るに従つて彼の活動はいよ／＼眞剣になつた。人が少くなつたからと云つてそれだけ彼の給料が増へる譯でもない。しかし、彼の仕事と努力とは三倍にも四倍にもなつた。人々は彼を馬鹿正直者だと笑つた。中には、『どうせ潰れることが目に見えてゐるぢやないか。一日も早く止めた方がお互の徳だ。他所へ行くなら、いくらでも世話してやる』と親切に云ふてくれる者もあつたが、彼の心は動かなかつた。人々は嘲笑を浴びせて去つていつた。もう誰も彼に話しかけてくれる者もなくなつた。

主人を守り、店を守り、孤軍たゞ勤めた。しかし、大廈の崩

れるや、よく一人の守り得るところではなかつた。彼の捨身の勤めも空しく閉店の日が來た。彼は涙を呑んでこの店をさることになつた。

この時、神は既に彼のために素晴らしい贈物を準備されてゐた——今の店よりも、もつと大きい紙屋の主人が迎へに來た。しかも、この店で彼に與へられた位置は、も早や一小僧上りの店員ではなかつた。堂々たる支店長であつた。

彼の信念は、如何にして現在、今日の職務を果すかといふこと一つであつた。それ以外になにもなかつた。店が潰れて主人から暇が出るまで、與へられた務めに驀進する。これが店員としての生きる道であるとしてゐた。勤めの與へられてゐる限り

は、それに全生命を捧げて他を顧みなかつた。

云ひ換へれば、一日生涯に徹底的に生きたのであつた。

自分の身のためを考へ、自分一人の富を考へ、さうして成り立つ日を以て立身出世とするのは既に舊い自由主義經濟時代の遺物である。今日は、人間細工を捨て、高く大きくお國のためを考へねばならぬ時である。

嘗て、ある高利貸と話したことがあつた。彼は、

『この世の中は金です』

と云ふ。

『金が必要ですか』

『勿論、云ふまでもないことですね。金がなければ、どうする』

ことも出来ないではありませんか。子供の教育一つにしても金です』

『高利貸でよく儲かつたでせう、子供の教育も十分出来たでせう』

『まあどうにかね』

『何人やりました』

『四人、教育しました』

『どうです、學校を卒業して、皆立派にお國のお役に立つてをられますか』

『長男は大學を出ました』

『そして何處に勤めてゐられます』

『この二階にをります』

『この二階にお勤めですか、さうすると、病氣におつとめですね』

『え、まあさうです』

『その他の方は』

『二男は身體は丈夫ですが頭がもう一つよくないので困つてゐます』

『どうも、あなたの家は繁昌とは云へませんね、商賣は繁昌かも知れないが、子孫繁昌とは云へないではありませんか』

『世間でよく云ふ、學校は出たけれど、といふ仲間のものばかりです。ホト／＼、困ります』

『あなたの考へが違つてゐるからですよ。あなたのやうなことを、世間では、いすかの嘴の喰ひ違ひと云ふ——』

『それではどう考へますか』

『頭がよくて、身體が丈夫で、性質がよい、かういふ子供をこしらへておけば何も心配はいらない。かういふ子供を造るやうに考へることだ』

『どうしたら出来ます』

『親が、己を空しうして、君國のために捧げきる。これ以外に道はありません。親が、かういふ日本精神に生きてをれば、子供も亦、親のため、國のため、陛下のために日本精神に生きて子供となる——』

自分は果して出世するだらうか、子供がよくなつてくれるだらうか、と思ひ患ふ人が多い。しかも、これは世の人々の最も大きい、誰にも共通する悩みである。

要らぬ心配はおやめなさいと私は云ふ。

自分の将来を最も明かに豫見出来る、たつた一つの方法がある。

自分が果して、日々常々、感恩、報恩の生活をして、何處に向つても恥しくないか、どうか。これさへ判れば、将来は自ら明かである。

今日一日、天皇陛下の御鴻恩にいさゝかなりともお應へ出来たかどうか。お國のために少しでも、お役に立つたかどうか

か。友人、隣人の恩を感謝して通つたかどうか——夕べに静かに反省して、何等思ふて悔なき一日々々であれば、人生のこと更に吾々が思ひ患ふまでもなく、神が守つて下さる筈である。

今日一日が生涯である。

今日一日が、感恩、報恩の生活であつて、それ以外の何ものでなくてもよい。

宗教家と呼ばれる者は、殊にかくあらねばならぬ。これが、宗教家の唯一の生命である。

二

向島に布教所を構へ、それが教會となつてからも、私は長ら

く米の一升買ひをした。或る日、囊中に一圓廿錢あつた。今日一日が生涯だと思つて、一圓は尊きことのために捧げて二十錢残つた。考へてみると、住込人の食ふものがなかつた。「食へる時は共に食はう。飢ゑる日は共に飢ゑよう」これが教會のたてまへであつたから、強ひて私が食ふに心配をしなくてもよかつたのだ。

廿錢もつてお助けに出た。途中、ふと、一升十八錢、といふ米が目についた。廿錢あれば一升買へる。私は、神様がお前達は今日飢ゑさゝぬと仰有つてゐると思つて、一升買つた。それを自轉車のうしろの荷物臺にくゝりつけて、又、お助けに廻つた。

或る家の御内儀さんは、私の安米の一升買ひをよく知つてゐる。その日も自轉車の荷物を見て、

『先生、また今日もねえ』

と云つて笑つた。

『そばに主人がをつて』

『なんだねえ』

と云つた。主人は餘り私にも會ふてゐないし、信心もしてゐなかつた。

『いゝえ、先生はいつも、一升二十錢までの安米を、五合一升と買はれるんですよ』

と云つた。

主人は頷いて、何か眞剣な様子をした。そして、この時から主人も亦、熱心なみちの信心に生きた。

私は、布教師の生活は常に眞空であれと云ひたい。宮本武藏と佐々木巖流の試合の一節に作者は『武藏の目は巖流を吸引する——』と書いてゐる。勝敗を越えた武藏の心は、眞空であつた。心の眞空は巖流の身も心も諸共に、武藏の劍の下に吸ひ込んだのであつた。

みちの布教師の生活精神は、これではなくてはならぬと私は信ずるのである。

彼は高工の三年生であつた。そしてその家にとつてはたつた一人の息子であつた。一學期中頃に徴兵検査が始まつた。母

親は、徴兵裕餘願ひをさゝずに學校を中途退學さして検査を受けさせた。

ドイツが何處にあるか、イギリスが何だか知らない年老いた母親である。歐洲戦争の戦局も知らなければ、南支がどうの、佛印がどうのと話せる母親でもなかつた。たゞ、お國の御奉公といふことを知つてゐた。そしてまた、

今日一日が生涯

だといふことを知つてゐた。

これは知識ではなくて、信心であつた。

『無理にさうしなくても、高工を卒業して技術の上から御奉公も出来るではないか』

『長期戦だ、何も急がなくてもよい。來年卒業してからでも十分の御奉公は出來よう』

等々と、親戚は云ふたが、母親は何と云はれても承知しなかつた。

『今日はお國の大事です。お國の大事に、明日を待つてゐられない。今日を外して、次の時を待つてゐるやうなことでは申譯ない。今日の旬に生かしてもらうてこそ、本當にお國の御奉公だ』

と云つて、とう／＼この主張を通した。

學校を二學期で止めて、息子は中支に出征した。學校でも、この母親の信念に動かされ、彼のために、特に卒業試験さへ出

來れば卒業證書を與へると云つて、問題を戦地に送つた。

銃とる暇に、彼は、戦火の中に、答案を書いた。不思議に、皆できた。彼にとつて、難しい問題は一つもないほどであった。悠々と卒業試験をパスして、身は戦地にありながら高工を卒業した。

彼は母親の徹底した信心の徳に護られてゐる幸福者である。

私は彼の前途を祝福せずにはをられない。

も早や、金がものを云ふたり、地位がものを云ふたりする時代ではない。たゞ、己を空しうして、君國に捧げきつた生活の中に積まれる徳だけが輝く時代である。本當の神國日本の姿が

現れる時代である。

自己本位の迷蒙は消えろ。

我利々々の盲執も消えろ。

今日こそ、吾々の教祖のひながたの實踐あるのみの時代である。

不自由の中に歡喜を見出す生活。

感恩、報恩に盡される生活。

これだけである。そして、この生活は、

今日一日が生涯

といふ信念によつて貫徹されるのである。

昭和十五年十月二十日印 刷
昭和十五年十月廿五日發 行
昭和十五年十月三十日再版發行

定價・五十錢

東京市小石川區富阪町

著者 丸山時次

奈良縣丹波市町川原城三〇七

印刷兼發行所 天理時報社

右代表者 岡島善次

今日一日

409
31

終

